

2025年に公開された映画作品の中で、筆者が見逃してしまった作品について触れておきましょう。映画館での公開は今や、『国宝』のような超ロングラン作品がある一方で、予め極めて短期間のもの、また興行的な意味合いで止む無く短期で終了するものがあるようです。また、筆者の自己都合で見逃してしまった作品もあります。二度と出会えないということはないでしょうが、非常に残念かつ悔やまれることでもあります。

直近のことで言えば、KBCシネマでの「サタジット・レイ レトロスペクティブ2025」での7本の作品が上映されました。この中で『音楽サロン』（1958）を見逃したのは痛恨の極みでした。『チャルラータ』（1964）『大都会』（1963 今回は『ビッグ・シティ』というタイトルに変わっています）でのサタジット・レイの高い芸樹性とメッセージ性を考えると全作品を見たかったのですが残念です。こうした機会でないとサタジット・レイを見ることができないのも残念なことです。これまで『LETO』（2018）『インフル病みのペトロフ家』（2021）『チャイコフスキーの妻』（2022）を発表してきたキリル・セレブレンニコフ（1969~）の新作『リモノフ』（2024）も気になった作品です。『ヨーゼフ・メンゲレの失踪』と訳せる作品（原題『The Disappearance of Josef Mengele』）を今年のカヌ映画祭で発表しているようで日本での公開が待たれます。こんな具合に列挙していくと、小田香『Underground』、ババク・ジャラリ『フォーチュンクッキー』、呉美保『ふつうの子ども』、ミゲル・ゴメス『グラントツアー』、崑利子（タカシ・トシコ）『じぶん、まる！ いっぱいはなし』（撮影が小田香）、王兵『青春- 苦-』『青春- 帰-』（2本で6時間18分という上映時間）といった作品があります。今後改めて見る機会ができることを祈るだけです。

話は変わり、12月6日の報道でNetflixがワーナー・ブラザーズ・ディスカバリーの主要事業を720億ドル（約11.2兆円）で買収するというニュースが

流れました。ここで主要事業として買収されるのは、ワーナーの映画等の制作を担当するスタジオ部門、ドラマ等のケーブルテレビ放送局の「HBO」、そして動画配信の「HBOマックス」ということです。ワーナーは2024年12月期決算が113億ドルの最終赤字に転落し、持株分割や身売りを検討していたと言われますが、ワーナー買収交渉はパラマウント・スカイダンス、コムキャスト（傘下にユニバーサル・ピクチャーズ、ドリームワークス）も行っていましたが、最終的に資金力と迅速な経営判断を特徴とするNetflixが強みを発揮した結果となりました。ただ、政治の問題があるようで、ウォール・ストリート・ジャーナルは今回の買収で動画配信サービスのシェアが単純計算で30%となり、反トラスト法上の懸念があるとしています。また、Netflixはトランプ大統領の敵視するリベラルな社風に近いため、警戒を強めているとも伝えられます。第一次政権時トランプは、通信大手AT&Tによるワーナー買収の差し止めを求めて訴訟を起こした経緯もあります。Netflixの対抗馬パラマウントはトランプとの関係が密接であり、Netflixの買収に対し裁判所に差し止めを請求すると見られ、トランプもその意向に向く可能性があると考えられ、波乱の可能性は否定できないようです。

さて、Netflixがワーナーブラザーズを買収したとすれば、どのような変化が起こるのでしょうか。例えば、コメディからドラマ、リアリティ番組に至るまで、より多様なポートフォリオを構築できるようになります。特に、ワーナーが得意とするアクション超大作や、ファミリー向けのコンテンツが充実するでしょうという見方が一般的です。そして、「配信優先モデルは、多くの視聴者が『倍速再生』や『ながら視聴』をすることを前提としているため、最初から最後まで視聴者を惹きつける、分かりやすくエンターテインメント性の高い商業作品が優先されやすくなります。莫大な制作費を回収するため、特定のニッチな層ではなく、世界中の最大公約数的な視聴者を狙った作品作りが主流になれば、監督の作家性が強く反映された実験的な作品や、静かで内省的な芸術作品は、相対的に減る可能性があります」となり、「視聴者数を重視した大衆向け作品の割合は増えると予想されますが、同時に、ブランドイメージや賞レースを見据え

た芸術性の高い作品も継続して制作される、というバランスになる可能性が高い」と考えられています。

Netflixは、コンテンツと制作のために膨大な資金を投入していて、2025年度のコンテンツ投資額は約180億ドル（2.7兆円）に上ります。例えば、本年配信された『フランケンシュタイン』の製作費は1.2億ドル（180億円）です。同社の借入金を調べると、2025年9月末時点で1億4463万ドル（2.17兆円）に達します。全世界の有料会員からのサブスクリプション収入は、3億人とされる会員から、おそらく5.7兆円程度と見込まれます。潤沢な資金を背景に、かなり闊達な活動が約束されているものと感じます。しかし、デメリットもあるでしょう。まず、従来の配給システムや収益構造が変化し、伝統的なスタジオの収益基盤が揺らぎかねない恐れがあります。次に、それに関連し映画館への観客導入が減少することが考えられ、映画館業界との間での摩擦が生じることもあるでしょう。また、インディペンデント系映画作家にとっては、資金調達の新たな選択肢を提供する一方で、商業的・芸術的な主導権の喪失や長期的な収益機会の減少といった深刻なデメリットをもたらすリスクもあります。やたら問題発生の可能性を感じるのです。

今年は強力なプログラムが実現できたのではないかと筆者はNetflixについて考えていたところに、この買取話が飛び込み、改めて考えをまとめようとしたところです。『ハウス・オブ・ダイナマイト』『フランケンシュライン』など上質な作品の発表は実に喜ばしいことです。一方で、期待を込めていたノア・バームバック『ジェイ・ケリー』それにエドワード・ベルガー『端くれ賭博人のバラード』の新作は、スターシステムを前面に押し出したエンタテインメント性を重視しながらも底の浅さを感じる印象薄い作品であり、映画が発揮しなければならない総合芸術性から大きく逸脱した作品であることに大きな失望を覚えたところです。これは、かつてハリウッドの蹉跌を繰り返す行為に他ならず、映画の使命と役割から遠いものと考えます。歴史は繰り返すと言われますが、大いに不安に駆られました。考え方を換えれば、破壊と創造を繰り返すことで進歩を遂げるということもあるのですが。こうしたときにイランのジャファル・パナヒ監督の『ある女優の不在』（2018）を見る

と、映画の本質的な部分に触れた思いがして、イランの社会情勢を大いに悲観せざるを得ないものの、その告発とリアリズムに純粹さと清々しささえ感じてしまい拍手を送りたくなるのです。一人の胸の内側にあるものを、一人のテーマでありながら、それは万人のテーマであり、万人の見るべき作品に作り上げるジャファル・パナヒと言う映画作家に感慨を覚えるとともに、長回しの手法をここまで効果的に使った手腕に驚くばかりです。

追記：ブルームバーグの12月9日の報道では、パラマウントがワーナー・ブラザーズに対し敵対的買取を仕掛けたとのことで、Netflixの買取額720億ドルを上回る1084億ドルを提示したそうです。混沌とした先行きになりました。